

A 204 都市勤労者家庭の主体的食様式の形成について—「1985年大都市ニュータウン在住の雇用労働者夫妻の生活時間調査」ととづいて—  
 昭和女大家政 ○上岡薫 昭和女大短大 瀬沼頼子 天野寛子

目的：高度経済成長後、日本の食生活様式は大きく変化をとり、二つの流れを見ることが出来る。一つは「便利・簡便・多様さ」を売りにして企業主導型の食様式であり、他はこれを批判し「手づくり」型食様式を志向しているとのである。こうした状況の中で特に共働き家庭においては独自の生活条件にあわせて「基本的食生活知識技術にとづいた簡便で安全かつ栄養豊かで家族の協力を育てる」食様式を形成するという課題をとっているのはおぼである。このような視点から、食生活の重点、調理時間と献立の関係、料理数、時間短縮しているところ、担当者の気持ち等について分析を行う。

方法：方法及び調査対象の特徴は「E大都市ニュータウン在住の雇用労働者夫妻の生活時間・生活様式」報」で述べられるが、本報告では特に、食生活に関するアンケートと献立表を中心に分析した。

結果：家事労働、なかで調理・食事の片付けは、本調査においてほとんど妻によってなわれている。食生活の重点のあり方や工夫、程度をみたくない時等、無職・パート・常勤でちがいはなく、現段階では共働き家庭独自の生活条件にあわせた主体的食様式の形成を自覚して 夫妻の調理・片付け時間と食生活の重点(M.A.)

いると言えない。

	調理時間		片付け時間		栄養	健康	安全性	簡便	おいし	困らん	マター
	分	時	分	時							
無職	1	2.04	0	51	63.8	33.3	46.4	1.4	36.2	13.0	1.4
パート	0	1.44	0	40	60.0	32.0	38.0	6.0	30.0	20.0	8.0
常勤	5	1.20	5	33	73.3	36.7	40.0	0	16.7	30.0	0
計					64.4	33.6	42.3	2.7	30.2	18.8	3.4

順位、時間、分、%